會報
第六年第三号
昭和十年三月一日発行

毛度澤の事ども

過日の上越線では汽車の中で便所に行く奴位癪にさわった事はない。何しろ中里駅迄超満員而も僕は此の怨門の便所の戸板に押しつけられて一晩中立ち通しと云ふ情ない有様である。口の悪い奴は狸は松葉でいぶせば忽ち参って正体を現はすとか云ふが物凄き「アンモニヤ」の「いぶし」にかゝって既に日暮里辺りで参ってしまった。

こんな「アンモニヤ」漬けになって迄何故我々は汽車に乗らねばならぬのか　此の理論的根據如何!!なんて済ましては居れない。用意の手拭で應急の防毒マスクを作り拾九貫三百匁の体重を平均に両脚にかけて直立して便所の戸板に寄り掛って居るが何時の間にやら両足は「ホツケ」の姿勢となる。

曾我の練習のお蔭でもないが何時とはなしに夢

路に入ると此の両足は適宜に深い〳〵「ホツケ」の姿勢となり安定は益々良くなり遂に目が覚めて見たら白皚々たる雪原には非ずして便所の前で尻もちをついて居た。

誠に不吉なる山への門出であった。こんな時には碌な事はないに決って居る。午前八時頃が「ぺんちゃん」が越後新潟方面から中一分で「ぺんちゃん」が越後新潟方面から中四十一里にやって来る事になって居るが當てになるものか、来なかったら如何しよう　と考へて停車場に行って見たら果して見えない。僕はすご〳〵として独り高い〳〵山に登って行くと云ふ処で目が覚めた。場所は中里ホテルの一室で時に午前八時三十分であった。

× × × × ×

僕が学生時代「金ちゃんおよしよ」と云ふ事があった。何んでも本郷の赤門の辺りで世に美しい娘が「金ちゃんおよしよ」とか云って虹に浸って居たとか居ないとか　云ふ其の金ちゃんではないが又我敬愛するぺんちゃん事別名の金ちゃん〜金沢の故郷ではぺんちゃんでは通らない正に金ちゃんであるが）でもないが　シッケイ沢をつめてしまうと「金ちゃんだまし」と云ふ処があるそうだ。場所はむ、一尺で国境尾根と云ふ処である。何しろ

「金ちやん」がだまされて仙の倉と思って得意になつて登って来た処だそうだ　然らば其の金公は何処の金公だ。だました奴は誰だと云ふ事になるが針葉樹会には除り縁のない金公であるからだまされたって一寸ともかまわないが、あの真白いキラキラ光って居る鋭い仙の倉山頂辺りに「金ちやんし」だましと云ふ愉快な而も気楽な名が付いて居るのが一寸嬉しい。

× × × × ×

「オヤキ」の小屋に着いて見たらぺんちやんが劇持から借りて来た鍵は算筍の鍵だった。実際あんな時に成ると二人とも一生懸命である。何しろ普段ぺんちやんの話に依れば如何なる鍵前も針金一本で易々開く筈の腕前であるが矢張り駄目らしい。僕は僕でかねて自慢の腕力を持って窓枠をメリメリとはがして結局枠の中の硝子を四枚とも破ってしまった。まるで二人で法政の「ヒユツテ」を壊したに来た様たものである。処が遂か下の方から法政の入が四人来た。此時は流石厚顔の二人も少々「テレ」てしまって小屋を壊したと云ふ事が止むを得ざる理由に基く事を説明した。が一寸冗の毒だった。

× × × × ×

今度僕が新しく仕入れた「アザラシ」は一寸皆さんに知らせ度い位い具合がよい。嘗って外の川で孫さんの「アザラシ」を必要以上に工等なりと評したが全く良ければ良い程良いと云ふ事が明りした。

然し此処に悲しい出来事がある。昔々その昔とんちやんが太田屋から買った又キー靴の一件である。此の靴はとんちやんに仕える事約三、四年前して其后僕に仕える事無慮八年、遂に今度の毛度沢で参ってしまった　気毒な限りである。僕が何時とんちやんから貰ったか明きりしないが最も合法的な方法に於て立派に「とんちやんし」の許可を得て貰った事は確実である。もうあの靴ははけない。上皮が手で引張っても破れる迄になった。買った時は三拾何円と云ふ上物であったが今や昔の姿なし。悲しい哉!!。

処が思ひ出したが是れは今改めて此の紙上を借りて「とんちやんし」の御諒解を得なければならない。と云えば諸賢は「ハハー　あれだなし」と感付かれる位有名になってしまった。「スリーピング　バツグ」の一件である。孫さんは僕が「古くなった家族は失礼だから返せない」と云って居ると感んに宣傳して居るがあれは僕の真情ではない。真

情は理屈なしに返し度くないのです。と云ふと諸公は恐ろしい奴だなぁと云ふかも知れないが此の二三年あの「スリーピングバッグ」は僕にすっかり同化して僕の着物より好く体に合ふ。合ふとなれば情がこもる。情がこもれば手離し度くなくなる。と云った工合である。

而も今や暖かき毛布の裏打と云ふ半永久的加工を施してしまった。とんちゃん　許してくれ、其の代り將来決っと此の償ひはする。株で儲けさすとか　或は倫敦の馬券が當った時なんかには男子の一言決して間違はない。其時には寐袋付きの自動車位は平気で進呈する、其の代りあの袋はとんちゃんには絶対ないものとしてあきらめてくれない？と云った工合である。

毛度沢の事どもなんて云って遂々脱線してしまったが毛度沢の詳しい事はぺんちゃんが書いてくれる事になって居るから其の方に委せる事にして筆を擱く。

（狸）

雪の山の山三態

雪の山の晴れたるは新鮮だ。嶺に陽光燦と輝いて一碧の空際に、白衣の裾は木立の柔毛につゝませて、駒かから肩へとまとひ上げた辺りに処々氷化された面が陽に映えて、五月の若鮎を思はす銀鱗を閃めかしてゐる。その山々を望んで溯渕とした快よさが身内を走る。

二月九日朝八時半、先に来てた近ちゃんに迎へられて中里の駅に下り立つ。南ま近く国境の山々の輝く姿を目を細くして飽かず眺めた。

兵糧係のコンちゃんが御馳走をドッサリ仕込んで来たので、とても手に負へないから人夫を頼んで貰ふ。スキーはけないが、よく鉄砲打に山に入ることのある吉爺さんが輪樏でついて来てくれる。此の方が有難い。桐生高工の小舎が仙之倉沢と毛度沢の出合近くに出来て今朝は其処へ十人許り先に入ったと云ふので新雪に一尺ばかり深いラッセルの跡を、割に楽に、日に照らされて汗を流しながら行く。土樽の劔持の家で一寸休んで矢張り今日山に入ると云ふ法政の学生四人に挨拶して先に出かける。

土樽の鉄橋から眞正面に光る仙之倉を仰ぎながら今日の天気を明日迄もと希ふ。眞白な雪野原を縦横に我物顔に残された兎の足跡を見ては吉さん飯の無いのがうらめしそうだった。

二時少し過ぎ桐生高工の小舎に着く。一寸休む。日は照るとは云へ休めば風は肌寒い。三時出かけ

る。これからは全然新雪でラッセルが大変だうと思ってゐたら谷の中、木立も深く雪は割に堅くしまってゐた。三時間以上もかゝると心配してゐたが、五時半には毛度沢法政の小舎に着いた。

谷は今日は静かだった。「此の谷は風が強いで、木の雪は木レ少しも積りません」と歩きながら爺さんが話をして成程と見上げて来たが、今は風も無く枝もそよがぬ。唯落ちようとする太陽が越路の雪を茜に染めて、雪山は今宵静かなタを迎へる。

―二―

雪の山に風の叫ぶ日は豪快だ。風は崩に雪煙を舞はすと共に若人の血を湧き立たせて軽い戦慄と快よい緊張をチリリと胸に残して吹き過ぎる。

二月十日の朝は吹き荒ぶ風に明ける。硝子戸を透して見る空は雲が低く垂れて、木々の梢は風に汝いてゐる。近ちやんはと見ると一昨日の夜行列車では便所の前で夜を過したとこぼしてゐたが今日は十九貫なにがしの巨軀をシュラーフザックに手際よく包んで腸詰の様に、又々とねいってゐる。暖い小舎の中で風の音を聞いて荒れる外の景色を思ひながら眠りもせず寝めもしない快よい時をウツラ〳〵と過す。こんな工合で寝床を抜け出すのが遅くなって、それから火を燃して、御飯を終へた時には十時も大分過ぎてゐた。

こんな日に仙丈倉へと云ふ気もなく皆と一しょに唯シッケイ沢の様子でも見て来る位の軽い気持で少し登り初めた。法政のMさんなどはあの人達が「雑木レと呼んでゐる朝の排泄を営むつもりでが一しょに出かけたのでシールもつけてゐなかった。

彼で登りには随分苦心をしてゐた。

昨晩の中にスッカリ仲よくなった四人の人達と例の通り無駄話をしてユックリ登る。

シッケイ沢がグッと左に折れてゐる辺りでお菓子をたべて遊んでゐたら下から桐生高工の小舎に泊った人達が二十人以上にもなってみんな一列に並んで段々急になって来た谷の真中を上る。間も無くあの辺が角だと云はれて、もうこんな所まで来てしまったのか、三百米も上れば好いだらうと思った。後は割に簡単らしい。尾根を蔽った雲はまだ去りもやらず、横なぐりに吹きつける風は湿気の多い雪を頬に打ちつけて痛を腐らせる。一寸休んでパンをたべると誰かがもう下りようかと云ふ。下りるときまるのは早い。尺場の好い所でシールを外すと、重い雪にのめったり、かと思ふと急に雪質が変って投げ出され。相変らず乱暴な滑降をやる。僕達が一番先

きに下り始めたのだったが、また途中で遊んでて結局小舍についたのは一番後だった。それでもまだ三時少しし過ぎてゐなかった。さっきまでまだ降ってたのは雪だったが小舍に来ては軒端打つのは雨だった。暖いタ方だ。小舍の前に出て見ると大笹平から万太郎へ続く岩場を黒く残して今は風の無い尾根が狭霧に煙って日は暮れて行く。

三

雪の山に雨の降る日は――得も云はれぬ物淋しさと一面にはまた云ひ知れぬ懐しさがある。雨は峰の雪を洞し立木の梢を濡らし幹を傳って流れて、そしてはまた人々の心までもシットリと包んでやがて春遠からじと呟いて行く。

十一日の朝は巓から渓まで皆かすかな細雨の中に浸されてゐた。北緯三十六度五〇、海拔千二百米、二月半ばに此処で雨に会はふとは思はなかった。急いで仕度をして近ちやんと二人外に出る。八時十五分。法政の人達はまだ一日滞在と云ふ。今更ながら時間に余裕のある学生の身が羨ましい。雨は暁晩中を降り通して今もなほ雪をとかし遠くの木立を霞ませて静かに音もせず降りかゝる。小舍の前まで出て見送ってくれる。空を仰いで

「よく降るなあ」

「春雨ですね」

「サヨナラ」

「御機嫌よう」

酒落者の月形半平太なら濡れても行き度い春雨だ。然し背につけたピッケルは青氷を慕っては来たものこの雨には泣くだらう。足にはくスキーならばこの雨の為に雪の重さを啣ちもしよう。

重い荷を軽く背負って近ちやんが水の間がくれに渓の縁をスル〳〵と滑って行く後に続く。密度小雨こそ降れ、気は軽くノンビリした気持で下りてそれでも一時間はかゝらずにデトの小舍へと土地の人は桐生高工のを呼んでゐる）に着く。丁度居合せた剱持の爺さんに挨拶して、其処からはズッと廣くなった川原を濃雨に頻を冷して行く。その河原の北に延びた向ふに、そんなに高くも無い飯土山が頭を雨雲に隠して扇に展げたスロープの裾丈けがそれも仄かに望まれた。此処でも雪原に降る雨は薄々の気は無くて、ッックリした暖かさを運ぶ水滴と感ずるのだった。

土樽を過ぎ松川を左に見てやがて中更も近い。雪野原に踏まれた一本道を五七人宛、黒頭巾に黒マントの烏の行列は近よれば中里の小学校に通ふ

頬の真赤な子供達だった。皆並んで道をよけてくれる。何処から通ってるのと聞けば松川からと答へる。今日の佳き日を「雲に聳ゆる」を歌っての帰りだらう。モンペイはいて紺飛白の羽織もま新しい。そしてその絣は、牡丹雪のそれよりも白く、大きくフワリと浮いてゐた。

白く続く畑の間に雪も積らせず黒い縁を見せて流れる小川の豊かな川水に、白い影を落してゐるのは何かと思ったら猫柳の芽だった。その銀の毛皮に包まれた芽は枝一ぱいに附いてゐて、火きなのはやがて来る時を待ち切れず今にもハチ切れそうにふくらんでゐた。こゝにも伸びようとする春が忍びこんで来てゐるのだ。

（ペン）

日光行

水だあまり日光湯本がスキー場として宣傳されなかった頃あの粉雪と冬の閑静な宿で明るい窓際の部屋で炬燵に入って数日を楽しく送った印象を忘れかね て来た。今年は稍開け過ぎてしまって以前の様な良さは見られなかった。手塚君等と四人の一行で土曜の朝出発して四時間半で湯本につく。歩かずに夜行にも乗らずに行けるスキー場で温泉があるのは何と云ふても便利な所であらう。たゞ日光一馬返間のあの小さなマッチ箱的な電車丈は何とかバスに代へてもらい度いと思ふ。

ゲレンデハ大して良いとも云ふことは出来ぬが まあ〳〵と云ふところで、只雪質丈は高さが高い丈に粉雪でスピードは出るし気持は良い。手塚君は最も急な斜面で長くボーゲンの練習をした。僕は辻君とは随分永い間の交りではあったが氏のスキーの妙技を拝することを得たのは此度が始めてであった。夕方森林の中の路を迷ってあまり遅れたので手塚君が迎へに来て呉れたのには恐縮してしまった。宿は此の前に板屋に泊った時とは全く印象が裏切られ、スキー場が発展すると原始的なスキー客を歓迎する時代とはちがってあまりに事務的になり過ぎてしまって感じが落くなってしまふ。南間ホテルはスキー客に火鉢を出さぬこと、電灯があまりに暗かったことはたゞ宿賃の方が安くても是非改良して貰ひ度かった。今度のスキー行で僕にとって最もうれしいのは春が近いた時天気が良くて雪の反射が多く全体の世界が明るくなる様な感のするのを期待して居ったが来だ〳〵湯本は冬の眠りよりさめず時折曇った空からは雪が落ちて来たりした。夜は楽しく話をしたりして過した。流石に夜着の肩の処は明け方は少々寒か

った。翌日は金精の方に出かけたが途中から引かへして林間の大きーを楽しんでしまふ。只二日の大きー行であつたが愉快な日であつた。帰りの明智平の辺で見た樹氷の美さは又格別であつた。

（久保田）

比叡山と湯ノ山越え

（八浩輩たるを省みず戦場に駆出候。もとより討死覚悟の上に御座候）

秋晴れの絶く林及を家事の為めに山へ入る友と別れてひとり京洛へと向ふ。汽車は朝霧の未だに晴れぬ京都駅に上ル下ルさへ知らぬ身を残して走り去る。壹すぎて用もすませ先づ入りこむ丸物の図書部。明日一日出来ることなら京阪の先輩方を尋ね低くとも共に山へでも行ってみたいと並ぶ山の本を繰ってはみたものゝ汽車電車の様子は分らず結局比叡独行となってしまった。

夕日の赤く京の街々山々を照す頃五十嵐先輩を紫竹初音町に尋ねる。幸にして すぐにお宅は見つかったけれども折から相憎のお留守。それでも喜んで迎へ送って下さった坊ちゃん奥様には始めて京を訪れた私にとって何とはなく嬉しかった。

明けて京の三十六峯朝靄の中に眠る中を出町柳より乗った電車は八瀬で乗り換へて ケーブルカーは忽ち四明嶽へ。遠く近くの紅葉の仙境も一入旅では眺めても張合ひなく根本中堂さへ丸人には何の興味も起さない。唯太い松の木が疎残に枕を並べてゐるのだけが今も記憶の中に残る。足は自ら下り路へ。比良の眺めは美しい。

琵琶湖は船で坂本から左に伊吹を遠く望み右に三井寺を近く眺め尾遅き船もいつしか大津の港になっく。

大津は見る所もなく京都より一路大阪へ。お下りさんはお下りさんらしく、駅前の案内所でお教へられるまゝに白い自動車で住吉は太田先輩の下宿へ向ふ。いつもいつも遅くならなければお帰りにならないとの宿の主婦の言葉に電話を難波まですれば幸ひにも賑ふ夜の大阪の案内から腹一杯の御馳走まで恐懼おく能はざりき。

御多忙の高瀬先輩を加へて三人で山の話部の事を語りつゝ遂に夜遅く湊町に見送りまでして蔵いて関西本線名古屋行きにルツクサツ

クならぬ　赤革のカバン片手に　鈴鹿なる湯ノ山越えんと　乘り込んだ。同室のハイキング氏に行き先を尋ぬれば　春日山とぞ答へられける。

拓殖は三時。待つ寒い駅の　明ける東の空は日本晴れ。貴生川で乘換へ　日野で下車。音羽にバスの着いたのが七時。大河原に入る峠を越えて松尾川の橋の下を　流すいかだに立つ若者の口調む節に　思はず知らず　立ち止まらせられる。

山道は略々地図の如く　御池鉱山道を左に　水(スイ)沢(ザハ)峠路を右に残す。道はあくまで平々坦々。河は広く清く緩かに曲る。紅葉は盛りを過ぎて行く程に道は二分し　左すれば炭焼小舎で行詰る。右に曲り　橋を渡れば　まもなく又　水沢峠道を右に走らす。やがて松尾川を横切れば　左に兩毛山への切開あり。まもなく湯ノ山峠へ着く。

「勢江の境を走る鈴鹿山系の　南の端を北には　ガソリ受けとめる」山容豊かなる御在所山聳え立ち　その西に兩毛山　緩かなる起伏をなして横はる。振りかへれば　不気味な「鎌首を擡げる」が如き鎌ケ岳。遠く伊勢ノ海が霞む。鈴鹿の山は　穏かなり。

期待した湯ノ山の湯は山の湯ならで　伊香保ながらの歡楽郷。一浴　山を馳け下り　高い電車で四日市へ。名古屋へ着いたのは八時を過ぎてゐた。

心にかけて送って下さった　部屋に時を刻むあの柱時計の　お禮旁々拜顏の栄に浴さんと　電話で　小乘先輩をお尋ねすればお留守。　やむなく一人で栄町を彷徨って　夜半　東京へとぞ向ひける。

（クン）

○○

昭和六年以来病臥靜養に努めて居られた會員中島嘉一郎君は急に病勢更り、二月二十七日午前七時、心臟麻痺で逝去されました。仍って會員近藤、磯野両氏は三月一日午後一時の御葬儀に参列され花輪一対を靈前に供え哀悼の意を表されました。三月八日臨時針葉樹會を開き中島君追悼記念冊子発行を計り故人と同學年（昭和六年）の人々が編輯の任に當ることに決しました。故人に関する寫眞書翰及原稿を磯野計藏氏宛お送り下さい。

過日松木謙三氏毋堂御不幸の節若干香奠をお供えした処長岡の松木喜之七氏より鄭重なる御禮状に接しました。

三月一日大友亮藏君西下。門司浅野セメント支店に転勤されました。（園山）